

イササカ先生の締切

爆弾おむすび

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

サザエさんに登場する、イササカ先生の日常物語。
締切を守らないイササカ先生に訪れた不幸とは…

目次

イササカ先生の締切

やあ、こんにちは。イササカ ナンブツです。

磯野家のお隣に住んでいる、小説家のイササカです。

みなさんからはイササカ先生と呼ばれています。

最近、お隣に住んでいる波平さんなんですがね。

磯野家でゴミ扱いされてるようです。

いやいや、かわいそうですねえ。

理由は、気に入らない部下や後輩に対して、何かと難癖をつけて殴る蹴るの暴力をふるったり、OLのスカートの中をこっそり盗撮してたのが上層部にバレて、会社を懲戒解雇され甲斐性なしになったから、らしいのですが。

まったくもって、情けない話ですなあ。

無闇に人を傷つけたり、ましてや盗撮なんぞに手を出すようになってたら人間お終いですな。

え？私ですか？私はイササカ家の大黒柱ですよ。

だって私の職業は素敵な印税生活の小説家です。

甲斐性なしのどこぞの一本毛ハゲとは違いますからね。

ストレスが溜まったら浪人生のジントクに「勉強しろ！」と叫びながら好きなだけ暴力をふるえますからな。

ハツハツハツハツハツハ！

あとウキエの着替えと入浴とトイレと彼氏との○○○を盗撮するのもやめられませんよ。

ヒヤハハハ。気分は田代○さしです！

おっとこんなことを言ってる場合ではないようです。

小説の締め切りが今日までなんですよ。急がなくてはいけません。

ピンポーン

く！奴が来た…!!？

ノリスケだ。あいつが原稿を取りに来たんだ。

まだ原稿は出来上がってないのに…

「んんん!!? イササカ先生。小説の方は出来あがつてますかなあ?」

「ノ、ノリスケくん…それが、まだ一枚も、出来ておらんのだよ」

ゴスツ!!

く!!? あ、あばらが…あばらが折れた!!?

ゲホゲホ!!?

「ビヤハハハ！先生、僕は冗談が嫌いなんですよ。

今日中に仕上げられますね?」

「そ、そんな…無理です」

「おや? 無理ですか!!? そうですか。

…では次はチ○○でも切り取ってあげましょうか?

そうすればやる気になりますよね!!?」

「それだけはやめてくれ! 私には弁護士じゃない、小説家だ。

ゴメンナサイ。助けてください」

「本当に悪いと思つてますか?」

「も、もちろんだよ。

だからこれ以上殴らないで! ぷりーず!」

ここまで徹底した命乞いは生涯初めてだった。ここまですれば、さすがのノリスケも情けというものをかけてく…

「では、ここで死んでください」

「は!!?」

「締め切りを守れない外道には死こそふさわしいのです。

僕が処刑してあげますよ。じっくりと苦しむようにしてね!!? ケケケ」

ひいひい! なんという恐ろしい男だ、ノリスケは!!?

こうなったら此奴を殺害するしかない!!?

くくく…3日前にタラちゃんから買った拳銃でぶつ殺すことにし
ましよう!!?

ゲヘヘ、この机の中に拳銃がありますからね。

ノリスケ!!? 貴様はここで死ぬのだ!!?

さあ! オープン・ザ・マイデスク!!? そして出て来い。拳銃よ!!?
バン!! (引出しを開ける音)

「な、ない!!? ということだ!!? なくなっておるぞ!!?」

「ハイバブーバブーチャーン」

そこにいるのは、イクラちゃん!!? なんでこんなところに。ノリスケが連れてきたのか?

む!!?

イクラちゃんが右手に握っているのは…私の拳銃ではないか!!?

「おやおや、イクラが拳銃を見つけたようですね。

さあイクラ、イササカ先生を肉の塊にしてあげなさい。じつくりと苦しむようにね!」

「ハイイ」(満面の笑顔で)

ズキューーン!!

「ゲハ!!? な…何で!!?」

どういうことだ? なんでイクラちゃんが、ノリスケを撃つたんだ?

「チャーンバブーバブバブハイハイ」

な、何を言っておるのだ? 理解できん!!?

ひい! なんて銃口を私に向けてるのだ?

そ、そうだ! タラちゃんを呼ぼう!!?

・
・
・
・
・
・

「お待ちですく〜! あ、イクラちゃん。

どうしたですか?」

「チャーンバブーバブバブハイハイ」

「タ、タラちゃん。イクラちゃんはなんと言ってるんだい？」

「この家と土地の権利書と今までウキエさんを盗撮した画像と動画が入ったデータ全てをよこせと言ってますう〜」

「ええええ!??そんなく〜!苦勞して手に入れた私の家をおお!??」

「チャーンバブーバブバブハーイハーイ」

「よこさないと殺すと言ってますう〜」

「あの、イクラちゃん…」

盗撮データだけなら、ダメ、かのう?」

急にイクラちゃんの目の色が変わりよった。

これは本当に『殺る』目付きだ…!

ぐぐぐ…仕方ない。この家を差し出すしかないようだ。

そして私は家と土地をイクラちゃんに奪われた。

私は今、安いボロアパートに住んでいる。

そこでコツコツと小説を書いて生計を立てているのだ。

今度はノリスケのように恐ろしい担当はいないし、少しくらい原稿が遅れても殴られるようなことはない。

ただ、今の私には家族がない。

娘のウキエを盗察してたのがバレてしまい、それが原因で離婚をしてしまった。

ま、裁判沙汰にならなくてよかった。

ピンポーン!

おや!?原稿を取りに来たようですな。

残念ながらまだ全然出来てないのですが、少しくらい遅れても許してくれますからな。

気楽なものですよ。

「チャーンバブーバブ」

「こんにちは。原稿を取りに来たと言ってるですう」

「そんな馬鹿な!?!? いつもは温厚な青年が取りに来るのに…

どういう事なんだ!?!?」

私は完全にパニック状態になっていた。

しかも、イクラちゃんの服には大量の紅い液体がこびりついている。

もはや嫌な予感しかしないが…

「バブバブハイイチャーンバブ」

「ここに来る途中でぶつ殺したと言ってますう」

「ひい!!?!? 殺したくく!?!?」

ま、まさか…イクラちゃんが、私の新しい担当者なのか!?!?」

「ハイバブバブ」

「さつさと原稿を出せよハゲ!と言ってるですう」

「そんな、いやそのまだその…原稿は…その…出来てないんだ」

「バブバブーハイイ」

「それでは、これから動けなくなるまで殴ると言ってますう。

ついでだから、ボクも参加するですう」

「な!?!? そんなああああ!!?!? ちよつとタラちゃんまで!?!?」

参加しなくていいよおお!!?!?」

「バブバブくくく♪」

「ウヒョヒョヒョですう。とつても愉快ですねえ。イクラちゃん♪

うくん。面白いですう。もっと殴るですう!!?!?」

「ギャアアアア!!?!? やめてとめてやめてとめて!!?!?」

ガキツゴシヤアボコバキイ!!?!?!!?!?

・
・
・
・
・
・

かくして、ボロ雑巾になった私はブリーフパンツ一丁でゴミ捨て場に放置された

そんな私のところにタラちゃんとイクラちゃんが現れた。

「ハイバブウバブウチャ〜ン」

「また明日 続きを言うと行ってますう。」

ボクもイクラちゃんと一緒に、イササカ先生のところに遊びに行つてあげますう！」

な、なんて幼児共だ!!?

なんか波平の気持ち少し分かったぜ。

波平はいつもターゲットにされてるもんな。